

なぜヒトは他人を助け、協力しようとするのか

川合 伸幸（名古屋大学情報学研究科准教授）

心理学の黎明期には、ヒトは生まれてからの経験によって、性格やどのような行動をするかが決まると考えられていました。他人に親切な人もいれば、強欲な人もいますが、それらはそのような性格になるべく育った、というのです。

何十年にもおよぶ研究の結果、ヒトは生まれつきある行動傾向を持っていることがわかってきました。たとえば、生後10ヶ月に満たない赤ちゃんに、2種類のキャラクターが登場する紙芝居を見せて、どちらを好むか調べた研究では、他人を邪魔するキャラクターより、他人を助けるキャラクターのほうを好むことがわかりました（紙芝居の後で、2種類のキャラクターの人形を渡してどちらを取るかが調べられました。赤ちゃんは好きなものに手を伸ばします）。

ここで大事なことは、その善いキャラクターや悪いキャラクターは、赤ちゃん自身に何の利益も害も及ぼしていないことです。自分に関係のないやり取りを見て、好悪を判断するので、ヒトは生まれつき他人に協力的な人を好む傾向があると考えられます。

わたしたちは、サルの中なかでも家族や集団のメンバーとの絆が強く、自分には利益がなくても他個体を助けるマーモセットという南米のサルを使って、第三者間の平等／不平等なやり取りをどう判断するかを調べました。2人の実験者がサルの前に立って、それぞれが手にしている食物を交換する公平条件と、一方の人がもう一方の人から食物をもらうのに自分はお返しをしない不公平条件のやり取りを見せて、しばらく

してから、2人が同時に新しい食物をサルに差し出しました。どちらから食物をもらってもよいので、公平条件では、2人の実験者から同じ割合で食物を受け取りました（50%：50%）。しかし不公平条件を見た後は、1人で食物を独占したズルイ実験者から食物を受け取る割合が減少しました。ズルするような人から何かをもらうのは、嫌だということです。

そのほかにも、わたしたちは寄付をするとき幸福感が高まることや、そのときの脳活動を調べると報酬とかかわる領域が活性化する、つまり他人に何かを与えることは、自分自身にとって気持ちのよいことだ、ということが実験で示されています。

つまり、ヒトに近縁なサルも、無償で他人を助け、自分とは関わりのない不公平な人を嫌う傾向があり、ヒトの赤ちゃんは初語が出る前から、他人を助けようとする人（キャラクター）を好み、わたしたち成人は、他人になにかよいことをすると気持ちよくなるのです。これらのことを考えると、わたしたちは生まれつき、他人を助け、協力し合う傾向があることが伺えます。

おそらくこれは、進化の過程でズルをする人や独善的に振る舞う人は集団からはじき出されて子孫を残す機会を失い、逆に協力的な人たちの子孫が生き残ってきたから、いまのわたしたちにもそのような傾向が受け継がれているのだと考えられます。

生得的な傾向は根強いので、非対面でコミュニケーションを取るインターネット社会でも変わらないと考えています。